

術前のインフォームド・コンセントにおける 患者の理解度と看護婦の役割の検討

—患者 18 名に実施したアンケート調査を通して—

B 棟 6 階

○ 匹 田 奈津恵 植 田 浩 子
澤 田 真由美 西 口 真 紀

I. はじめに

現在 B 棟 6 階では、医師は病状や治療方法の説明、看護婦は入院オリエンテーションやアナムネーゼ聴取、術前オリエンテーションをすすめる中でインフォームド・コンセントを実施している。しかし手術を控えた不安定な心理状態で、患者はそれらをどの程度理解しているのか、さらに患者の理解を促す援助とはどのようなものか考えた。岡堂¹⁾は、「人は不均衡で不安定なときには、より強く外部からの影響を受けやすい。そういう状態にある患者に対して医療従事者が的確な援助と介入を提供することができたならば、患者は新しい対応行動を用いて、安定性を取り戻すことができる」と述べている。そこで私たちは、術前の患者の疾患や治療への理解度を知るとともに、それに対する看護婦の役割を見直すため本研究に取り組んだ。

II. 研究方法

1. 調査期間 平成 13 年 7 月 3 日～8 月 31 日
2. 調査対象 B 棟 6 階で調査期間中に手術目的で入院し協力が得られた患者 18 名、
年齢 61 ± 12 歳、男性 9 名 女性 9 名
3. 対象疾患 消化器疾患全般
4. 調査方法 研究目的、調査内容は研究以外に使用しないことを説明して承諾を得、無記名での協力を依頼し、下記の時期に独自で作成した質問紙を病室にて患者自身で記入してもらい翌日回収した。
1 回目：入院時アナムネーゼ聴取後
2 回目：手術前日
2 回目の質問紙を配布するまでに、術前の医師による説明は全患者に実施されていた。
5. 調査内容 (1) 病状についての理解度と反応 (図 1-①②)
(2) 手術の必要性についての理解度と反応 (図 2-①②)
(3) 手術の方法についての理解度と反応 (図 3-①②)
(4) 手術後の合併症についての理解度と反応 (図 4-①②)

(5) 麻酔の方法・種類・麻酔による身体への影響についての理解度と反応

(図5-①②)

(6) 他に知りたいと思われる内容9項目(図6)

(7) 手術を受けるまでに看護婦に希望すること7項目(表1)

また(7)については2回目のみ実施した。

6. 測定方法 (1)～(5)において4段階でその集計を割合で示し、検定はカイ2乗検定を用いた。(6)(7)においては集計を単純計算し人数で示した。

III. 結果

1. 集計結果 回収率は100%であった。(無回答も含む)

2. 回答内容

図1-①から図5-①に示す理解度は全体を通して1回目より2回目の方が向上していることがわかった。反応については図4-②の2回目のみ否定的な反応が見られた。またこれらに関してカイ2乗検定を実施し、図3-②については有意差があることを確認した。図6に関しては1回目と比較して2回目は減少していたが、術直前でも疑問が残っていることがわかった。表1に関しては医師からの説明に看護婦の同席を希望する患者は少なく、声かけ、オリエンテーションや補足説明を希望する患者は多かった。またそれぞれを年代別で割合を示したが差はなかったため結果から省いた。

IV. 考察

小松²⁾は、「病状や検査結果、手術や麻酔の具体的な説明を受けることは、自分が直面している状況をより明確に把握する材料にもなる」と述べている。よって手術を直前に控え具体的な説明を受けた患者は、状況をより把握し理解度が向上したのではないかと考えられる。しかし今回の調査で理解の程度はわかったが、それ以上深く調査しておらず、実際どこまで理解して手術に望んでいるか定かでない。また病状、手術の必要性、方法についての肯定的な反応は、より具体的な説明を受けたことで満足感と安心感を得られたことを表しているといえる。しかし術後の合併症についての否定的な反応は、手術の効果と反面、合併症という危険性を説明され知識が増し、新たな不安を抱いた患者がいるということを示しているのではないかと考えられる。また医師からの手術の説明後に残る患者個々の疑問も、不安へつながる可能性を秘めている。医師からの説明に看護婦の同席を望んでいる患者は少ないが、「看護婦が忙しいから」という答えがあるように患者の中には看護婦に遠慮している部分があることも考えられる。また多くの患者が希望する看護婦の声かけや術前オリエンテーションは、患者の全体像を重視したやりとりでより患者の欲求が明確化し、必要に応じて補足説明をすることや、更なる説明が必要だと思われる場合には医師からの説明の場を再度提供するなどの介入へとつながるだろう。

V. 結論

患者の理解度について

- ・表面的ではあるが向上している

看護婦の役割について

1. 説明前後の患者の表情や言動の微妙な変化を読み取ること
2. 質問や疑問がないか再確認すること
3. ゆとりのある態度で接すること
4. 個別性を重視した対応をすること

VI. おわりに

小松²⁾は「本音で自分の気持ちを語ることができ、それを受け止め、支持してくれる看護婦の存在があれば、患者は大きな安心感や励ましを得ることになり、困難な問題解決の一步を踏み出すエネルギーを持つことができるだろう」と述べている。看護婦は術前の患者の緊張や不安を和らげ、また動揺・混乱している患者の心情を察知して、それを受け止めることが患者の充実したインフォームド・コンセントにつながるのではないか。

今回は性格や社会的背景、病名、告知の有無を重視せず手術を受ける患者全体に行った短期間のアンケート調査であり、それらに関わる心理状況は把握できていない。それらを踏まえた上でのインフォームド・コンセントにおける患者の心理に対して、看護婦として専門的立場からどのような働きかけが必要かを今後の課題としたい。

【引用文献】

- 1) 岡堂哲；病気と人間行動，中央法規出版，42 - 43，1987.
- 2) 小松浩子；手術患者とインフォームド・コンセント，臨床看護，20，1862 - 1865，2001.

【参考文献】

- 1) 林直子；手術に対するインフォームド・コンセントと看護，臨床看護，27，189 - 192，2001.
- 2) 佐藤禮子；手術患者とインフォームド・コンセント，臨床看護，19，720 - 723，1993.

図1-①病状について説明を受けたと答えた患者の理解度

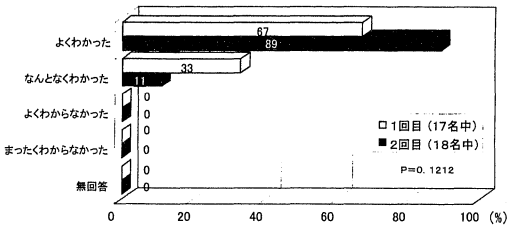


図1-② 病状について説明を受けたと答えた患者の反応

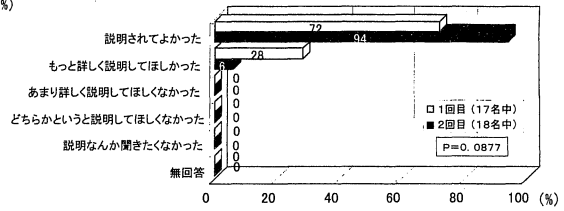


図2-① 手術の必要性について説明を受けたと答えた患者の理解度

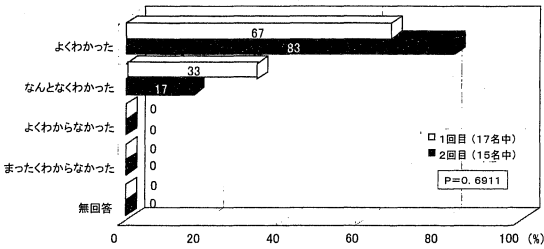


図2-② 手術の必要性について説明を受けたと答えた患者の反応

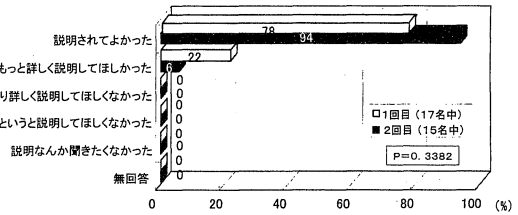


図3-① 手術の方法について説明を受けたと答えた患者の理解度

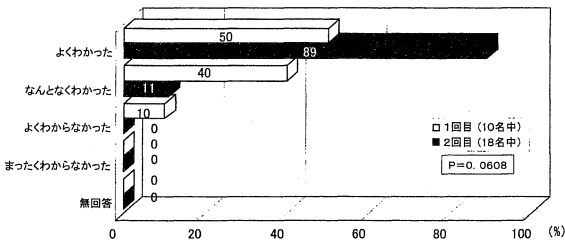


図3-② 手術の方法について説明を受けたと答えた患者の反応

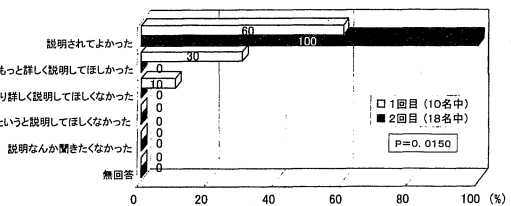


図4-① 術後の合併症について説明を受けたと答えた患者の理解度

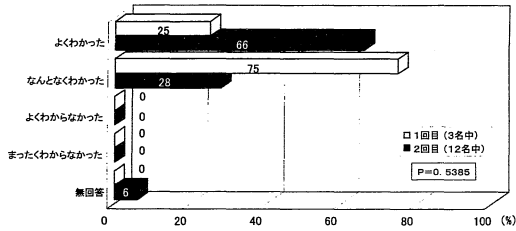


図4-② 術後の合併症について説明を受けたと答えた患者の反応

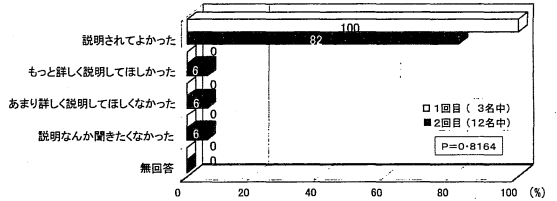


図5-① 麻酔の方法・種類・麻酔による身体への影響について説明を受けたと答えた患者の理解度

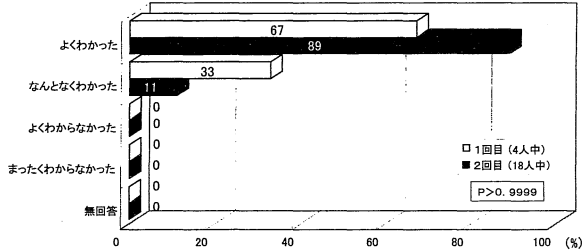


図5-② 麻酔の方法・種類・麻酔による身体への影響について説明を受けたと答えた患者の反応

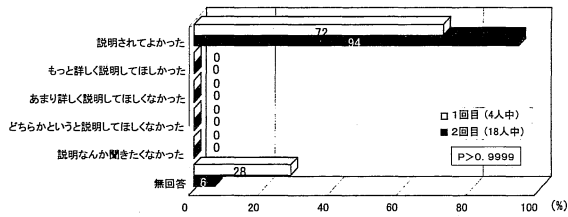


図6. 他に知りたいと思われる内容

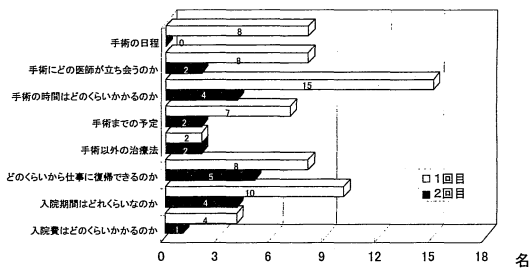


表1. 手術を受けるまでの期間で看護婦に希望することと理由(7項目)

項目	回答	人数	理由
(1) 医師からの説明時、看護婦の向き	A. 希望する	3	安心だから わからないことが多いから 心配いから
	B. 希望しない	10	医師にも看護婦がいた 看護婦は忙しいから 自分一人 緊張もいたから わからないことは自分で調べる
	C. 無回答	5	
(2) 主治医からの手術の説明時、看護婦の向き	A. 希望する	4	医師に何を聞きたいかわからないため 看護婦にも自分の意見、手術方法を聞いてほしい
	B. 希望しない	9	自分だけで充分理解できる 看護婦は忙しいから 緊張もいたため わからないことは自分で調べる
	C. 無回答	5	
(3) 医師から説明後の看護婦の呼びかけ	A. 希望する	9	手術の説明を聞いてから不安になる 確実となる 元気が出る 安心できる
	B. 希望しない	3	看護婦は忙しいから
	C. 無回答	6	
(4) 看護婦からの手術に関する予備質問	A. 希望する	12	不安感解消 親しみがでる わかるようになる 流れがつかめる
	B. 希望しない	2	知らないほうが気が楽だから
	C. 無回答	4	
(5) 医師との調整(特例の発定など)	A. 希望する	11	家族との時間を合わせなくてはならない 看護婦が間に立っていろいろな相談と 話が通らないといけない
	B. 希望しない	0	
	C. 無回答	7	
(6) 説明後の看護婦からの説明補足	A. 希望する	9	何回も聞きたいから 看護婦さんの立場からも聞きたい 安心 関係付けられる 看護婦のほうが言葉がわかりやすい 親しみがあつたのでより楽な気分できた
	B. 希望しない	2	わからないままに帰るから 医師の説明だけで充分
	C. 無回答	7	
(7) その他		0	